

菊人形

宮本百合子

青空文庫

田端の高台からずうつとおりに来て、うちのある本郷の高台へのぼるまでの間は、田圃だった。その田圃の、田端よりの方に一筋の小川が流れていた。関東の田圃を流れる小川らしく、流れのふちには幾株かの榛の木が生えていた。二間ばかりもあるかと思われるひろさで流れている水は澄んでいて流れの底に、流れにそってなびいている青い水草が生えているのや、白い瀬戸ものの破片が沈んでいるのや、瀬戸ひき鍋の底のぬけたのが半分泥に埋まっているのなどが岸のところから見えていた。大根のとれる季節になると、その川のあっちこっちで積あげた大根を洗っていた。川ふちの榛の木と木の間に縄がはってあって、何かの葉っぱが干されていたこともある。わたしたち三人の子供たちは、その川の名を知らなかった。

田圃のなかへ来ると、名も知れない一筋の流れとなるその小川をたどって、くねくねと細い道を遠く町の中へ入って行くと、工場のようなところへ出て、それから急に人通りのかなりある狭い通りへ出た。そこには古い石の橋がかかっていた。そして石橋の柱に藍染川とかかっていた。その橋から先はもう小川について行くことができなかった。空の雲を水の面にうつして流れている水は町へ入ったそのあたりから左右を石崖にたたまれ、その

崖上の藪かげ、竹垣の下をどこへか行っていた。わたしたち子供は、田圃のなかから川について町へ出て来るから、いつも流れをさかのぼっていたわけだった。不忍池から源を発している小川だったのだろう。

藍染川と母たちがよんでいたその石橋のところが、ちょうど、谷中と本郷の境のようになっていた。動物園から帰って来るとき、谷中のお寺の多いだら坂を下りて、惰力のついた足どりでその石橋をわたると、暫く平地で、もう一つ団子坂をのぼらなければ林町の通りへ来られなかった。

藍染川と団子坂との間の右側に、「菊見せんべい」の大きな店があった。ひろい板じきの店さきに、ガラスのついた「せんべい」のケースがずらりと並んでいた。ケースの上に菊の花を刷って、菊見せんべいと、べいの二つの字を万葉がなで印刷したり、紙袋が大小順よくつられている。菊見せんべいを買いにゆくと、店番が、吊ってある紙袋を一つとつて、ふつとふくらまし、一度に五枚ずつ数えてその中に入れ、へい、とわたしでよこした。ふくらんで軽い大きい紙袋をうけとったとき、おいしい塩せんべいの匂いがした。ときには、紙袋をもったとき、手にあつたかさのつたわって来るほど焼きたてだった。紙袋があったかいとき、子供はつれの大人を見て、笑った。

それよりも何よりも、菊見せんべいを買いにゆくときには三人の子供がついてゆきたがる別の理由があった。「菊見せんべい」の店先に立つと、店の板じきの奥に向いあつて坐つてせんべいをやいている職人たちの動作がすっかり見えた。火気ぬきのブリキの小屋根の下つている下に、石の蒲焼用のこんろを大きくしたようなものにいつも火がかつたとおこつていた。それをさしはさんで両側に三人ずつ若い男があぐらをかいて坐つていて、一人が数本ずつうけもつてゐる鉄のせんべい焼道具を、絶えず火の上でひつくるかえしてゐるのだつた。せんべい焼の黒い鉄の道具は柄が長くて、その長い柄をつかんで、左手、右手で敏捷にひつくりかえしつづけるのは、力がある仕事らしかつた。火気からはなれることないその仕事で、早くから白いちぢみのシャツ一枚に、魚屋のはいていたような白い短い股引をきる職人たちは、鉢巻なんかして右、左、右、左、と「せんべい焼」道具をひつくりかえしてゆくとき、あぐらをかいて坐つてゐる上体をひどくゆすぶつた。自然につく調子で、体をゆすぶりながら、かえしてゆくとき、鉄きゆうの上で鉄のせんべい焼道具がガチャンと鳴つた。

店さきにたつて、うつとりとその作業に見とれてゐる子供には、職人たちの身ぶりと音との面白さがこの上なかつた。いくら見ていても面白く、飽きなかつた。さあ、もう帰り

ましよう。そう云われても、子供たちは職人から目をはなさず上の空で、もつと、とねばった。子供たちは、いつも随分長い間、立つて見ているのだったが、職人同士がその間に喋るのを見たことがなかった。職人はみんないそがしそうだった。体のふりかた、道具をひつくりかえす威勢のいい敏捷な音、どれもが、こげるぞ、どっこい。こがすな、どっこい。と調子をとっているようだった。雨のふる日には、菊見せんべいの店の乾いた醤油のかんばしい匂いが一層きわだった。

菊見せんべいへ行くというとき、子供たちはもう一つのひそかな冒険で顔を見合わせた。菊見せんべいの手前に、こまごまと軒を並べている小商人の店と店との庇あわいの一つの露路をはいつてゆくと、その裏は案外からりと開いていて、二間、三間ぐらいの一軒だてがいくつもあった。その右のはずれの一軒が、おゆきばあやの住居だった。

小さい根下りの丸鬘に結つて、帯をいつもひっかけにしているおゆきは、その家で縫物をしていた。おゆきが針箱やたち板を出しかけている部屋のそとに濡れ縁があつて、ちよいとした空地に盆栽棚がつくられていた。西日のさしこむ軒に竹すだれがかかり、風鈴の赤い短冊がゆれていて、なめたようにきれいな狭い台所口があらいて、裏の田圃が

見えた。おゆきのうちには、猫がいた。

子供たちは、菊見せんべいへ行くとき、一緒に来る大人が母でさえなければ、おゆきのうちへよることが出来た。きようは駄目ですよ、お母様がまっすぐ帰れとおっしゃいましたよ、と抗議が出て、ちよつと！ほんとにちよつと！と、わたしは露路を曲った。おゆきの家と、そこに住んでいる、おゆきと浅吉とは、面白かった。

根下りの丸髷に結つて、長煙管でタバコをのむおゆきは、不思議にうす黒い顔をしてやせていた。喉がどうかしたように、少しかすれた声で、小さい子供たちに、おや、いらつしやいまし、と云った。そういう声で、おゆきは赤門の門番をしている夫の浅吉のことを、あつさん、あつさんと云つて話した。あつさんがね、お前さん、こういうんだよ、いけすかないつたらありやしないじゃないか、ねえ、などと笑いながら、ついて来た女中と喋っているおゆきの話しかたが、六つ七つの女の子の興味をそそった。うちでは、おゆきのように話すものがなかった。あつさんとおゆきがいるだけで、子供のいない家というのも珍しかった。

浅吉は、昔、祖父の俵をひいていたのだそう。祖父が田舎へひっこむについて、大学の赤門の門番になった。わたしたちの知ったとき、もう浅吉の木菟のようなふくらんだ頬

つぺたには白く光る不精髭があつたし、おゆきは、ばあやさんと呼ばれていた。

「ねえ、おゆきばあや、あつさんは赤門にいるの」

縫物をしているおゆきのわきにころがつて小さい女の子は質問した。

「そうですよ」

おゆきは、縫っていた糸を歯できつて、つぎのしるしにまち針をうちながら、

「あつさんは赤門。きのうも赤門、きょうも赤門でね」

「赤門でなにしてるの？」

「腰かけて、うちわでもつかってるんでしょうよ」

「ふーん」

どうも不思議だった。いつか赤門をとつたとき、ここに浅吉がいるはずだよ、と母が入ってゆく右手の門番のところをちよつとのぞいた。けれども浅吉はいなかった。いないね、と云つてそのまま行く母について歩きながら、わたしには赤門にいなかった浅吉の印象が刻まれた。浅吉が赤門にいるということに、わけのわからないところがあつた。

浅吉はいくらかこわくもあつた。お盆のとき浅吉とおゆきとは連立ってお中元に来た。こまかいたて縞のすきとおる着物にうすい羽織を着た浅吉は、白扇をパチリ、パチリ鳴ら

しながらあんまり物を云わず、笑いもせず、木菟のような眼の丸い頬ぺたのふくらんだ顔で坐っている。そのすこし斜うしろにぺたりと薄い膝で坐った根下り丸髷にひっかけ帯のおゆきが、浅吉をあおいでやるのか、母へ風をやるのか分らない団扇のつかいかたをしな

がら、
「ほんとに、うちのあっさんたら、正直なばかりで一刻もんだもんですからねえ、つい二三日前もね、奥様」

という工合で、いつまでも喋った。そういう日には、浅吉とおゆきとだけ別のところで一つお膳でお酒をのんだ。その仕度はおゆきが自分でした。さあ、あっさん、折角だから御馳走におなりよ。そう云つて、二人だけでお酒をのんでいるとき、おゆきと浅吉は何か低い声で話しあつた。おゆきはお酒がまわつて来ると、

「おまはんもつといけるはずじゃないか」
と云いながら浅吉に自分の酌をさせた。

また、おゆきの御飯のたべかたも、真似手がなかった。おかずがあつても、おしまいの一膳はお茶づけにして、ほんとにサラサラと流しこむのだったが、おいしそうにひとしきりたべてさてお香のものへ移るといふとき、おゆきはきまつてリズミカルに動かしていた

お箸を、そのリズムのまま軽く茶碗のふちへ当てて一つ小さく鳴らした。銀の箸でもあったら、その箸のひとあては、茶碗のふちで涼しい音でも立てるのであったろうが、雑用の厚手な茶碗と木の箸で、その音はカチとカタの間にきこえた。それでも、おゆきのお茶づけには独特のリズムがあり、菊見せんべいの職人の体のふりようとせんべい焼の道具をひっくりかえす音に通じあう面白さがあるのだった。

おゆきの身についていて、東京の山の手に育つ子供の心には、きわめてもの珍しくうつたいくつもの癖が、くるわの習慣であつたことが分つたのは、わたしが十七八になって、歌舞伎芝居をみるようになってからだつた。梅幸のお富が舞台の上で、ひっかけ帯で横にすわりながらおゆきがそういうときとよく似た声の調子でおまはんと云つたとき、すべてが氷解した。母が、子供たちをおゆきのところへ行かせたがらなかった母らしい潔癖と偏見の意味もわかつた。もうその頃は、おゆきは、別のところに引越して、養子の世話になつていた。

更に何年かたつたとき、何かの雑誌で「ねぶか」という落語をよんだ。落語をこのむ江戸庶民の感覚で、奥女中あがりを女房にした長屋の男の困却を諧謔の主題にしたものだった。奥女中だった女が、長屋ものの女房になつてもまだ勿体ぶつたお女中言葉をつかつて

いる。そのみのない横柄ぶりが武士大名への諷刺として可笑しく笑わせるのだった。その「ねぶか」のなかに、長屋の男が新しく来る女房と、取り膳でお茶づけをたべるたのしさを空想して、俺がザラザラのガアサガアサとたべると、女房はさぞやさしくチンチロリンのサアラサアラとたべるだろうという描写があった。そこをよんで、わたしはすぐおゆきを思い出した。おゆきのお茶づけとあの箸を思い出した。

おゆきが団子坂の下に住んでいたのは明治四十年より前のことだった。おゆきの住居や習慣は、樋口一葉が「にぎりえ」などでかいた雰囲気の中のものだった。そして、かぶらぎ 鏑木清方の插画の風情のものだった。そういうことがわかったのは、ゆきのおまはんの由来を理解したよりもあとのことだし、「ねぶか」よりもあとのことであつた。

父方の祖母、母方の祖母が、わたしの幼い時代に徳川時代から明治初年への物語を色よく刻みこませた人々であつた。いまわたしたちが封建社会の崩壊期として理解している幕末と、中途半端な開化期として理解している明治初年についてのさまざまな物語りをもつて。おゆきは、二人の祖母のだれも示さなかったやりかたで、明治初年の東京の庶民ぐらしの気分をつたえたたった一人の女だった。

六つ七つのわたしは、竹すだれのかかった軒ちかく縫いものをしていのおゆきのわきに

ころがつておゆきの家についていて、自分の家のはちがう匂いを感じ、西日を顔にうけながらチンチンチンチンと、何かをたたいているような音をきいていた。その音は、前のうちの中からきこえた。

「あれ何の音？」

「さあ……おおかた^{かざりや}鋳屋さんで何かやっているんでしょうよ」

でも鋳屋という商売が何だかわからなかった。おゆきの話ではその鋳屋が大家さんなのだそうだった。おゆきがその人にものをいうときの声の調子で大家さんというのは普通の隣家とちがう何かであることはわかったが、カザリヤという商売との関係がわからなかった。ねころがりながら竹すだれの下からのぞいてみるカザリヤの台所口にも、おゆきの家と同じような短い竹すだれが下げられていて、あたりまえの水がめや、バケツが流しもとに見えているきりだった。子供の目にカザリらしいものは表の小さな店にも、台所にも見えていなかった。

日露戦争がすんだころ、東京で元禄模様、元禄袖などと一緒に改良服というものが大流行した。歴史のありのままの表現で語れば、日本のおくれた資本主義は、日清戦争から十

年後に経たこの侵略戦争で再び中国の国土を血ぬらし殖民地化しながらその興隆期に入つたわけであつた。ウラルの彼方風あれて、とオルガンに合わせて声高くうたつていた若い母に、そんなことは何一つわかつていなかった。旅順口がおちたという一月二日に、縁側に走り出してバンザイをとなえた母の腰のまわりでバンザイと云つて両手をあげた六つの子、四つの男の子、よちよち歩きの児に、何がわかつていただろう。

勝つたおかげで一等国になれる、とよろこんだ日本の民草は、旗行列をし提灯行列をし、秀吉の好んだ桃山模様や、華美な元禄模様を流行させた。改良服は、その時代の氣風のなかのいくらか合理的であろうとする面、あるいは世界の中へ前進しようとする方向の思いつきであつたと思われる。

名のとおり日本服を改良して、洋装との間にしようとした改良服は、上を、つつ袖の口をひらひら飾りにし、うち合わせ襟で、スカートの部分とくつつけたワンピースだった。スカートは袴の伝統をもつて、きちんとたたんで襷をつけられ、バンドのうしろは袴腰の趣味で白細紐の飾りつきだった。

わたしには、メリンズ緋の改良服が一つあつた。その頃新小説に梶田半吉という画家のかいた絵が口絵にあつて、肩の上に髪をたらした若い改良服の女がバラの花に顔をよせて

いる絵があったりした。母は、自分のために改良服よりもっとハイカラと思われた一組の洋装をこしらえた。今思えば、白いレース・カーテンのような布地をふわり長くこしらえて、カフスのところとカラーのところが水色の絹うち紐でしぼられ、その紐が飾り房としてたれていた。その服を着て、海老茶色のラシャで底も白フェルトのクツをはいた二十九歳の母が、柔かい鰐びろ経木帽に水色カンレイシャの飾りのついたのをかぶって俥にのって出かけたとき、三人の子供たちと家のものとは、美しさを驚歎してその洋服姿を見送った。若い母は、ロンドンにいる良人のもとへその洋装姿の写真をおくった。はりぬきの岩に腰をかけ、フェルト靴の先を可愛く白レースと思われた服の裾からのぞかせ、水色カンレイシャで飾られた帽子のつばを傾けて、両手でもった一輪のバラの花を見ている母の写真。それは明治の幻燈のようになつかしく美しく素朴である。

けれどもロンドンでそれをうけとった三十七八の父からは、母が想像していたのとはまるで反対の手紙が来た。日英同盟していた小さい日本が、ロシアに勝ったということで、在留民の少いロンドンで父の受けた特別待遇は著しかったらしい。ノギ・トウゴーの名が建築家である若い父のまわりで鳴りひびいた。エドワード七世即位式の道すじに座席が与えられた。そういう父から、母へ来たのはインド洋をこしての叱責だった。あのお前が洋

服だと思つてゐる服は西洋の女のネマキであること。はいてゐるクツは人目に見せるべきものでない室内靴であること。ああいう写真は二度とよこしてくれるな。恥しい、ということであつた。

六つの娘は、母があんなに立派できれいだったのに、もう決して二度とその洋服を着ようとしなないので残念に思つた。

「ああちゃん、どうして洋服きないの？」

箆笥の一番下のひき出しに、三井呉服店とかいたボール箱に入つたままあるのを見て、娘がきいた。

「あれはお父様が西洋のねまきだつてさ」

そう云つて母は青々と木の茂つた庭へ目をやつたきりだった。その庭の草むしりを、母は上の二人の子供あいてに自分でやつてゐるのだった。ねまきはいいいものでないということとは、子供の心にもわかつて、だまつた。

その頃急な団子坂の左右に菊人形の小屋がかかった。馬が足をすべらすほど傾斜のきつい、せまい団子坂の三分の一ばかり下つて、人々の足もとがいくらか楽になつたところの

左側に一二軒、右側に三軒ばかり菊人形の店が出来た。葭簀ばりの入口に、台があつて、角力の出方のように派手なたつけ袴、大紋つきの男が、サーいらつしやい！ いらつしやい！ 当方は名代の（何々とその店の名を呼んで）三段がえし、旅順口はステツセル將軍と乃木大将と会見の場、サア只今！ 只今！ せり上り活人形大喝采一の谷はふたば軍記！ 店々で呼び合う声と広告旗、絵看板、楽隊の響で、せまい団子坂はさわぎと菊の花でつまつた煙突のようだった。白と黒の市松模様の油障子を天井にして、色とりどりの菊の花の着物をきせられた活人形が、芳しくしめつばい花の香りと、人形のにかわくさを場内に漲らせ、拍子木につれてギーとまわる廻り舞台のよこに、これも出方姿の口上がないで、拍子木の片方でそつちを指しながら、右にひかえましたる乃木將軍というような説明をした。ノギ將軍はすべての写真にあるような顔をした人形で、黄菊・白菊の服を着ていた。ステツセル將軍は、ただ碧い眼に赤い髭で、赤つばい小菊の服を着せられていた。往来からすぐ見えるところには、ありふれた動かない人形が飾つてあつて、葭簀の奥のぞくと廻り舞台の底はじなどが見え、人を奥へと誘つた。一の谷などでは、馬も菊で体をこしらえられていた。

十月下旬から十一月にかけて、団子坂の通りは菊人形で混雑し、菊見せんべいも、団子

坂の菊人形につながった一つの東京名物なわけだった。菊の花の造花や、薄でこしらえた赤い耳の木菟を売るみやげやが、団子坂上からやつちやば通りまでできた。

菊人形が国技館で開かれるようになってからは、見にゆく人の層も変ったらしいけれども、団子坂の菊人形と云われたことは、上野へ文展を見にゆく種類の人にも、そう縁の遠くない秋の行事の一つだったのではなからうか。千駄木町に住んでいた漱石の作品のどこかに菊見があつたし、団子坂のすぐ上に住んでいた森鷗外の観潮楼へは、菊人形の楽隊の音が響いたにちがいない。

幼いわたしにとって菊人形は面白さとうす気味わるさとのまじりあつた見ものだった。場内にみなぎる菊の花のきつい匂いになじみにくく、活人形の顔や手足のかちかちした肌色と着せられている菊の花びらのやわらかく水つぽい感じの対照も妙だった。母方の祖母が浅草の花屋敷へつれて行つてみせてくれたあやつり人形の骨よせと似た気味わるさが菊人形のどこかにあるのだった。

戦争ものでない菊人形と云えば、あのどっさりの菊人形の見世ものの中で何があつたらう。常盤御前があつた。小督こくごうがあつた。袈裟御前もあつた。一九〇五年に、団子坂の菊人形はそういうものばかりを見せていた。小さい女の子は気味わるそうに、舞台からすこし

遠のいて、しかし眼はまばたきをするのを忘れて、熊谷次郎が馬にのつて、奈落からせり上つて来る光景を見まもった。せり上つて来る熊谷次郎の髪も菊の花でできた鎧も馬もちように小刻みに震動しながら、陰気な軋みにつれて舞台に姿を現して来るのだった。閑静な林町の杉林のある通りへ菊人形の楽隊の音は、幾日もつづけて、実際あるよりも面白いことがありそうにきこえて来た。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七巻」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「大衆クラブ」

1948（昭和23）年第9号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

菊人形

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>